

# 萬葉に於て日本の感情を見る (四)

東京女子高等師範學校教授

石井庄司

## 防人の心情

國土防衛の戰士としての防人の歌については、これまでも度々説き及んできましたが、なほ防人の心情をうかがふのに重要な歌として、今回は左の二首について考へてみたいと思ひます。

○  
 霰あられふり鹿島かしまの神かみをいのりつゝすめらみくさにわれは來きに  
しなが、あすは、こほは、おほなり、みらわれは來き  
 庭中の阿須波の神に木柴さし吾はいはむ歸り來きまでに  
おほなり、みらわれは來き  
 大舍人部千文  
 若麻績部諸人

前の歌は、常陸國那賀郡上丁大舍人部千文の作で、防人に立つて行つたときの事を詠んだものであります。

「霰あられふり」は鹿島の枕詞で、霰あられの降る音がかしましいといふところから鹿島といふ地名に續いたものといはれてゐます。これは常陸國風土記にも、土地のならばして「霰あられ香島かしまの國」といふ語ありますから、古くからの言ひ傳であつた

らうと思はれます。

「鹿島の神」は、同じく常陸國風土記に出てゐる鹿島の大  
 神で、今の鹿島神宮のこゝであります。祭神は武甕槌神で、  
 國土平定に大功のあつた神。武甕槌神は、遠く天孫降臨の  
 とき、天つ神の仰せ事によりまして、今の香取神宮の祭神  
 である經津主神と共に出雲國に行つて、大國主神を諷し、  
 また建御名方命をしたがへ、ついで神武天皇御東遷の途  
 中、大和國にお入りになるに先だち、神靈ふつのみたまのつるぎ劍を降して、  
 神功をお顯はしになりました。今日では武の神様として尊  
 崇あがいたしてゐるのであります。

此の作者の住んでゐた那賀郡は、今の水戸市の北及び東  
 で、鹿島さはいふ隔つて居ります。防人に立つにあつて、  
 遙かにこの國土の神を拜して、心に期するところがあ  
 つたものと思はれます。

「神をいのる」といふ語は、萬葉集中には數ヶ所に見えて  
 居ります。例へば

天地の神をいのりて幸矢ぬき筑紫の島をさして行くわれは  
 天地のいづれの神をいのらばかうつくし母にまた言問はむ

なごは共に防人の作であります。そして「神をいのる」「こいふこに注意されます。今日では「神にいのる」「こいふやうに申しますが、萬葉集では、殆どみな「神をいのる」ことなつて居ります。

これは深い意味のあることで、「いのる」「こいふのは、眼に見えないものをはつきりとしたものにするこいふ働きだこいはれて居ります。防人に立つに際して、鹿島の大神を遙かに拜し、心に念じて、鹿島の神をはつきりこ現じ出すのであります。それはやがて自分の武運長久を念ずるこもなるのであります。また深く心に期するこころを明らかにすることもあります。

平家物語に傳へられてゐる那須與一の話に與一は、目をふさいで「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須の湯泉大明神、願はくばあの扇の真中射させて賜はせ給へ」……心の中に祈念いたします。

これも神をいのるのでありますが、このこき與一の眼の中にはありこも那須の湯泉大明神があらはれ賜うたものこ思はれます。私こもが何か心に深く期するこころがあつて

祈念をいたしますこき、産土神の姿がはつきり心眼に映つて來るのであります。これが、「神をいのる」であります。大舍人部千文の歌ではそれがもつこ原始的な神祕性を帯びてゐるやうに思はれます。さういふ點で、この歌は日本人でなければ味はへない一心境を示してゐるものこ思はれます。

この歌は以上のやうな重大な意義があるばかりでなく、次に「すめらみくさ」「こいふ大事な言葉を用ひてゐるのであります。嘗て支那事變の初め頃、齋藤茂吉博士は「皇軍おほいに勝ちぬの句神皇正統記にあり心つつしむ」(寒雲)こいふ歌を發表せられました。「皇軍」こいふ言葉が如何に力強くひびいたこでせう。戦陣訓が出されましてから、皇軍の語は一段こやきを持つてきました。また多くの人々にも親しまれてきました。その皇軍こいふ言葉は、この防人の歌にある「すめらみくさ」であります。そして、この言葉は萬葉集ではこの歌にしか用ひてありません。大舍人部千文こいふ東國の一人防人がこのやうな深い自覺の上に立つて、この語を用ひてゐるたものこすれば、まこに驚くべきこであります。たこへ深い自覺がなかつたにせよ、こにかく「すめらみくさ」「こいふ語を用ひてゐるこには、いさこも間違はないのであります。

さて、「すめらみくさ」こはどんな意味でせうか。「すめ

ら「すめらみくさ」(天皇)「すめらみくに」(皇御國)といふやうに、天皇の御上にかゝる物事に冠らせて、尊敬の意を表はす詞であります。「みくさ」は「みいくさ」即ち御軍兵といふこと、「すめらみくさ」は天皇の御軍兵といふことであります。東國の片田舎の一防人が、自ら天皇の御親兵であるといふ意識の上に立つてゐるのであります。特に歌では「すめらみくさにわれは來にしを」を歌つて居ります。

「すめらみくさに」の「に」は「こして」の意味であります。天皇の御親兵として、自分を出てきたのであるといふのでありまして、「われは來にしを」の「われは」こいふのも強い意志を示してゐます。「來にしを」は「來にしよ」同じに解釋したいと思ひます。「來たのだよ」こいふことで、何かの折に忘れようとする自分の志氣を奮起させるのであります。大舍人部干文こいふ人の事は、萬葉集に出てゐるだけで、外の歴史の本には全く何も載せられてありません。さういふ身分も低い、ほんの一防人ではありますが、「すめらみくさ」としての強い信念を持つてゐたのであります。今日、大東亞戰に當つて發揮された勇士の感懷も正にこれであると思ひます。わが國の傳統の尊さがうかゞはれるのであります。

次に「庭中の阿須波の神に」の歌でありますが、作者は上

總國の帳丁といふだけで、よくわかりません。帳丁は、主帳丁ともいひ、書記の役をする壯丁であります。

「阿須波の神」は、人の住む土地を管掌する神といふことであります。むかし宮中では座摩の巫の祭る神として、生井・榮井・津長井・婆比支の神々と共に五座といはれてゐた神であります。新年祭の祝詞には

「座摩の御巫の稱辭竟へ奉る皇神たちの前に向さく。生井・榮井・津長井・阿須波・婆比支御名は白して、稱辭竟へ奉らくは、皇神のしきます下つ磐根に宮柱太知り立て高天原に千木高知りて、皇御孫命の瑞の御舎を仕へ奉りて、天御蔭・日御蔭隠り坐して、四方の國を安國平けく知食すが故に……」

ミ出て居ります。神話では大年神の御子で、母は天知迦流美豆比賣といふことあります。大阪の官幣中社座摩神社、また輕井縣の縣社足羽神社などはこの神を祭つたものであります。

今の歌では「庭中の」にありますが、家の庭に祭つてあるものと思はれます。庭の中の神籬に祭つてある阿須波の神に木柴をさして、「自分はいははう、歸り來るまで」こいふのでありますが「ははう」は「ははうらうらふ」でせうか。

萬葉集卷十四の東歌の中に

誰ぞこの屋の戸おそふるにふなみにわが背をゆりていはふこの戸を

こいふ歌があります。これはむづかしい歌の二でありませんが、大體の意味は「誰であるか、この家の戸を揺り動かすのは、新嘗に我が夫をやつて、自分は一人家の中で齋み籠つてゐる、その戸を揺り動かすのは」こいふこころであります。「こいふなみ」は新嘗こいふこころで、これは、常陸國土記の傳説をみるこゝ、よくわかります。

むかし御祖神尊が多くあまのふみのかみの神々の處に巡行せられたとき、駿河國の富士山にお出でになつたころ、遂に日が暮れたので、宿をお頼みになりました。このとき富士の神は「私は早稻の新嘗をして家内ものいみをしてゐますので今晩はお宿が出来ません」云つて、お許しになりませんでした。そこで御祖神尊は恨み泣き悪口していはれるには「お前はさうして親を泊めないのか。これからはお前の住む山には、冬も夏も雪が降り、人も登らず、たべものを供へる者もないであらう」こいふはれました。そして筑波山に登つて、また宿を乞はれました。この時、筑波の神は「今夜は新嘗をいたして居りますが、お泊めいたしませう」こいつて、丁重にもてなされました。そこで御祖神尊は、大層よろこんでほめて歌をよまれたこいふやうなこころが出て居ります。

この新嘗に家内ものいみするこいふのが萬葉集の「いは

ふ」であると思はれます。「いはふ」は「齋」の字を書きます。そこで、庭中の阿須波の神に木柴さしの歌にある「いはふ」も、さういふ意味で「齋ふ」であると思ひます。防人に立つて、再び故郷に歸るまで、心を思ひ込めておかうこいふのでありまして、やはり、防人の敬虔な心情がよく出てゐると思はれます。

郷里に居るときは、それ／＼家業に従事する一農民であり、一人であるものが、一度召されて、「すめらみくさ」なるときは、全く別の人格を賦與されるやうに思はれます。それが現在の皇軍の有様ではないかと思ひます。上總國の一帳丁の歌は、正にかういふ心理を如實に表現したものでありまして一度防人として出發すれば、「すめらみくさ」して、心の遊離を起さぬやうに、出發にあたつて、わが庭の神に仕へ祭るのであります。何ともいへない嚴肅な感に打たれざるを得ません。

かういふ尊い心情は他に記載されて居りません。わづかに萬葉集の歌によつて今日私どもが窺ひ得るのであります。萬葉集が歌集として、千古に輝く大歌集であると共に、實に尊い古典であるこいふのも、かういふこころにあるのであります。僅かに二首の歌でありますが、汲めども盡きぬ深き意義を堪へてゐる名作であります。(つとむ)